

論文の内容の要旨

論文題目 ビルマにおけるカレンの民族意識と民族運動の形成

氏 名 池 田 一 人

本研究の対象とするのは、ビルマ（ミャンマー）における、20世紀に入ってから植民地後期（～1941年）から日本占領期（～1945年）を経て独立交渉期（～1947年）までの、カレンと呼ばれる人々の民族意識と民族運動の形成過程についてである。

植民地期の統計（1931年）ではカレンは、多数派のビルマ民族（総人口の66%弱）に次ぐ9.3%の人口割合を有し、下ビルマに限るとその割合は20%以上に上ることになる。多民族国家ビルマにおける他の「少数」民族が、おおむね自らの故地と言える集住地を持つのに対して、カレンの大部分は下ビルマに一带にビルマ民族と混住してきた。カレンはまた、仏教を主に信仰するビルマ民族に対して、ビルマにおいて最大のキリスト教人口を抱えている。カレン総人口に占めるキリスト教徒人口は16%ほどに過ぎないが、ビルマのキリスト教徒におけるカレンの割合は66%強にもなり、とくにその大部分を占めるバプティスト派の発言力が大きく、カレンといえばキリスト教徒という印象を外部に与えてきた。

カレンの歴史は通常、このバプティスト派のキリスト教徒を核として、植民地体制に迎合的であった「親英分子」、ビルマ独立に際して自前の国家を求めようとした「分離主義者」、ビルマ＝タイ国境でいまもって反政府武装闘争を続ける「叛徒」、などのイメージのもと、このビルマ世界に異質ななにものかとして語られてきた。

だが、カレンは宗教的には仏教やキリスト教諸派、精霊信仰者やカルト的諸宗教を含み、また言語的にもスゴーやポー、カレンニー、パオ、パダウンなど下位言語グループを抱えて多様な人々であって、外部から「カレン」と一括できる一様な民族意識を共有してきたわけではない。とくに多数派を占める仏教徒が、どのようにカレンという民族意識を持つに至り、どのようにキリスト教徒のカレン意識と交錯し、そしてのちにキリスト教徒の主導するカレンの民族運動にどのように参画していったのかがまったく知られていなかった。この点に鑑

本研究では、第1に、仏教徒の民族意識形成の一端を植民地期に出版された2種の仏教的なカレン史テキストとその背景の分析から探り、第2に、仏教徒とキリスト教徒の民族的経験の共有契機を日本占領期冒頭に起こった初めてのカレン＝ビルマ民族間の民族衝突事件に求める。そして、第3に仏教徒のみならずさらに広範なカレンを名乗る主体を糾合しえた、独立交渉期のカレン民族運動の細部を再検討することによって、この運動が従来の「分離主義」という評価に当てはまらないことを論証する。

第1の点については、1929年から1939年までに出版された仏教徒著者のウー・ピンニャとウー・ソオによる2点の仏教的カレン史と、ソオ・アウンフラによるキリスト教的カレン史の計3点のカレン史書を素材として、とくに前者に現われた仏教徒のカレン意識について論じた。その際には、その歴史観を支えている宗教や王権、民族といった概念とその論理構成が派出したビルマ語世界の19世紀を中心とした歴史的な文脈、そして2書の執筆動機が生まれた社会的文脈のふたつのコンテクストにテキストを位置付けて、おのおの「民族」の表出形態と民族に関する主張と動機を探った。

歴史的な文脈からの検討では、まず、ビルマ語世界における仏教徒の視点の上で王権の崩壊と宗教の衰退ととらえられていた19世紀の植民地化の流れの中で、この世界の主権者として民族(ルーミョウ)の観念が立ち上がっていき、やがて民族を単位とした社会的・政治的運動が20世紀初頭の植民地社会で開始されたことを指摘した。2書は「王統記」という体裁をとりながらも、カイン/クウイン(ビルマ語でのカレン)という民族を主権者として歴史叙述を行っているが、それを何ら不思議のないものとしてビルマ語読者が受け入れたのは、このようなビルマ世界の民族化が断絶を感じさせることなく進行し、定着していたためであった。

他方、よりミクロな2書執筆の社会的背景分析には、出版動機のひとつとなったビルマ語全国紙トゥーリア紙上で行われた「映画とカイン」論争の考察を通して、カレンが仏教世界で周辺化されている状況を指摘した。このような周辺化、または民族批判は、20世紀初めに仏教復興運動が始まったビルマ民族主体の運動が政治化し、キリスト教徒によって標榜されていた「カレン」を、政庁協力民族として指弾していたことが背景にある。そして、そのような「カレン」に含まれて、仏教徒として貶められたと感じた僧侶や作家、公務員などの知識人層に属する人々が、カレンもまた正統な仏教世界の一員である、とビルマ語話者にむけて反駁したのが、これら2つのカレン史であった。したがって、この仏教徒としての正統性という主張は、カレンの仏教的王統の過去を証明してくれる王統記という形式をまといつづなされなければならなかった。

第2の点について、日本占領期冒頭にデルタ地方で起こったミヤウンミヤ事件を題材に、一方ではこの地域に進出したビルマ民族主体のBIA(ビルマ独立義勇軍)あるいはタキン(ビルマ民族主義者)、そしてこれに呼応して地元から合流したやはりビルマ民族主体の自称BIA/タキンの人々と、他方ではおなじ土地に住みながらも宗教宗派も言語もばらばらであった「カレン」という、2種類の人々の間で突如として民族衝突が起こった様を描いた。後世の記録はすべて、カレン対ビルマの構図が前提されている。しかし、「カレン」と一括された側には、宗教宗派と言語サブグループによって特徴付けられる多様な集団が内包されており、一方ではバプティスト・スゴーのようにその組織に内在する文化的な機能によって、日々「カレン」が再生産され意識されるような共同体から、他方では言語の上でもビルマ化が進

行し、宗教的には隣村のビルマ人と信仰の場を共有する、カレン意識に希薄な仏教徒ポーまで、多様な人々が含まれていた。そして彼らは、ミャウンミャ事件まで、その「カレン」という名以外には、その名を引き受けた人々の人的交流を促す民族的機構、祭礼や儀礼、経験も共有してこなかった。

ミャウンミャ事件は、このようなカレンらに宗教や言語の懸隔を横断して下ビルマの広範な範囲で、初めての共通する民族的経験を与えた。ここではデルタのもろもろのカレン集団のうち、バプティスト・スゴーと仏教徒ポーを主に検討し、加えてカトリックやアングリカンのスゴーとポー、それにビャマーズウのスゴーなどのカレンについても言及した。この経験が事件の進展にあわせてこれらの人々のあいだに共有されていった過程は、シュウェトウンチャというひとりの仏教徒ポーが、やがてカレンの英雄として多様なカレン人の意識のなかで立ち上がり、記憶されていったイメージの生成過程に如実に現われている。そしてミャウンミャ事件をとおして、カレンという民族意識はより凝集性の高いものになっていった。この事件はイラワディ・デルタの中央部で起きた限定的な出来事ではあったが、同様の事件は東部のパブン地方でも起こっており、そしてこの事件を伝え聞いたひとりのあいだにも「カレン」という自覚を広めていったものと推測される。このような宗教・言語横断的なカレンの経験は、先立つ例がまったくなかった類のものであった。

第3部では、従来、分離主義の典型と評価されてきた独立交渉期のカレン民族運動を題材として、そこでカレン側によって設立を要求された「カレンの郷土」について、カレンを標榜するグループ毎にその主張を検討して、この郷土観に投影された多様なカレンのありようを炙り出した。総体として独立交渉期のカレン民族運動は、かように多様なカレンの民族統合を最大の関心事として、その郷土を独立ビルマという新国家の内側に設立しようとする運動であったことを論じた。

では、この運動に参加したカレンはどのような人々で、結果的にはいかなる選択をしたのか。第1に、バプティスト・スゴーを核とする主流派の KNU（カレン民族同盟）は、ビルマ東部により大きなカレン州設立を望んで、カレンニーやパオなども包摂しようとしていた。第2に、KNU から割れ出た KYO（カレン青年機構）は主にデルタを地盤とした、やはりバプティスト・スゴーが中心となっていた組織であったが、この人々はむしろビルマ民族との混住という現実を受け入れて、よりビルマ民族と親和的なかたちの政治制度をカレン民族の権利保障機構として選択し、独立ビルマに参加しようとしていた。第3に、平地のカレン民族運動が勢いをもった 1947 年半ばに「カレン」を名乗って参加したカレンニー諸派やパダウンは結局、他のカレンの運動とは一線を画して独自の協定をビルマ政府と結び、別個の自治州の地位を得て独立ビルマに参加した。これらに対して、仏教徒カレンについては BKNA（ビルマ・カレン民族協会）が参加してある程度の活動をともにしていたことはわかるが、その背後にある仏教徒カレン全体がどのような動きをしたのか、詳細は資料上の制約があって現段階では明らかにすることが出来ず、今後の課題として残されている。

以上検討してきたカレンに関わる3つの事例は、カレンなる人々の広大な顕在領域からすればごく断片的であるが、それらはカレンの民族意識と民族運動の形成過程において重要な時と場に関係していて、今まで記述されてこなかったものばかりである。そして、いずれの事例でも対ビルマ民族関係のうえでカレンの民族意識が深められ、民族運動が展開してきたことは特筆に値する。